

意図学習におけるリハーサルと項目提示の反復と虚再認の関連性 —DRM 手続きを用いた検証—

小島 万侑

本研究の目的は、項目を反復提示する回数と参加者が項目をリハーサルする回数を操作することで、野添(2020)の意図学習条件で示された結果が項目の提示回数の増加によるものか、参加者のリハーサル回数の増加によるものかを明らかにすることであった。実験は DRM 手続きに沿って学習段階と再認段階の2段階で構成され、参加者には事前に再認テストがあることを伝えた。反復提示回数とリハーサル回数は、学習段階における項目の提示回数(1回 vs. 5回)と各項目を参加者が読み上げる回数(1回 vs. 5回)を変えることで操作した。学習段階では、試行毎にリハーサル回数を指示する教示文が提示された後、学習単語の画面に移った。参加者は単語が提示されるとすぐに指定された回数の単語を音読し、残りの時間は構音抑制を行った。再認段階では、学習項目の再認テストを行った。参加者は提示された単語が学習したものであるかどうかを Remember、Know、New、Guess の4つの選択肢の中から判断することを求められた。実験の結果、項目の提示回数の増加と共に虚記憶の増加がみられた。この結果から、本実験における学習方法が単調であったことで提示回数の増加と共に参加者のマインドワンダリングを増加させ、リスト項目に対する注意を減少させた可能性が示唆された。これにより、活性化-モニタリング理論の観点では、リスト項目に特定の情報を符号化できず、リアリティ・モニタリングが困難になった結果、ルアー項目を棄却できずに虚記憶が増加したと説明できた。同様に、フェジートレース理論の観点では、リスト項目への注意の低下によって個々のリスト項目に対する学習が十分に行われなかったため、逐語痕跡よりも要旨痕跡の判断が優先されて提示回数の増加と共に虚再認率も増加したと説明できた。一方、リハーサルの回数による虚記憶の違いは認められなかった。この理由として、口頭でのリハーサルが維持リハーサルを促進したため、項目個々の記憶は強まったが、項目間に共通する意味記憶の符号化までは行われず、虚記憶を生起させる処理が行われなかったことが考えられた。以上より、虚記憶の生起要因として、項目の反復提示回数の方がリハーサル回数よりも強く寄与していることが示唆された。(応用認知心理学)